【 1 】

氏　　名	桑山正進（くわやましょうしん）
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第189号
学位授与の日付	昭和61年5月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	カーピシー＝ガンダーラ史研究
論文調査委員	（主査）教授 小野山節　教授 谷川道雄　教授 服部正明

論文内容の要旨

カーピシー＝ガンダーラ（ヒンドゥークシュ南麓のカーブル河流域）の研究は，インド史および中央アジア史のいずれの研究者の視界からもはずされてきた。著者は，近年急激に増加した考古資料の分析と総合の上に立って，従来現地資料でないために忌避されてきた漢文資料，とくに行歴僧伝を詳細に検討して，仏教がインドから中央アジアに伝播するさいに，「新しい姿に化粧し，衣装をかえた」場所として，この地域の役割とその歴史の解明をめざす。

本論文の構成は，前言，序章，第一～六章，付論からなり，図版を添えてある。

仏教の伝播における本地域の重要性と過去における研究の欠陥を述べた前言に続いて，序章では，考古学的発掘調査が最も組織的に進められたタキシラにおける仏寺の変遷について，J＝マーシャルの発掘資料とA＝ゴーシュの編年を再検討し，建築の石組み法の変化を基準にして6期に及ぶ仏寺の展開を明らかにした。最初期にあらわれる方形基壇つき仏塔は，インドの円筒形仏塔とは異なり，ローマ世界の宗教施設の形式を導入したもので，タキシラ初期には古来のチャイティヤ堂と新案の仏塔が並存した。Ⅱ期には，新案の方形基壇仏塔が定着するとともに四面に房室を廻らす大僧院建築が出現し，造寺活動の活発化によって特色づけられ，大規模な仏塔の構築にローマ皇帝廟の建築技法である車輪状構造が導入された。Ⅲ期は方形僧房が確立し，Ⅳ・Ⅴ期には，Ⅲ期の寺がはっきり二つに，すなわち塔院に奉献塔と祠堂をもつ寺と，全くそれらがない寺とに分れる。Ⅵ期は四面に階段をもつ十字形平面の仏塔が出現し，寺院の，また使用石材の巨大化がその特徴である。A＝ゴーシュの編年によって，Ⅰ期は紀元一世紀後半から二世紀初頭，Ⅱ期は二世紀前半とする。ゴーシュはⅥ期を五世紀末とするが，この年代はエフタルの破仏を前提としているので，著者は七，八世紀に変更し，ⅢⅣⅤ期を三世紀から六世紀の間に割りつけて，本論文で取扱う時代の編年的枠組を用意する。

第一章は，中国における訳経僧の伝記を資料として，四，五世紀に盛んになったインドと中国の往来の記録にみられる罽賓が，従来いわれているようにカシュミールに特定することはできず，むしろガンダーラを指すことが多いことを示す。罽賓に求法した僧の目標の一つである仏鉢は，ガンダーラの首都プルシ

ャプラに，この地で創出した聖遺物として実在したもので，シャカ活動地でなかったガンダーラにおいて，仏教信仰が隆盛に向ったとき，本生処を用意し，仏陀飛来処を考察し，仏鉢なる聖遺物を創案したものであって，ガンダーラに西接するナガラハーラにあった仏影なども同種のものであった。そしてこの時代の行歴僧は必ずカラコルム西脈道によっていたことを示す。

つづいて第二章では，この交通路がエフタル勢力の分解にともなって廃絶し，カーピシーとバーミヤーンからトハーリスターン，ワッハーン，ターシュクルガーンに至る，ヒンドゥークシュ西足道へ移ったことを明らかにした。従来，エフタルの攻略と破仏活動によってガンダーラにおける仏教の停廃がもたらされたと考えられてきたが，山田明爾説によりながら，宋雲行歴記事を詳細に検討し，ガンダーラの衰退は，むしろテュルクによって550年代にエフタルの本拠を侵略された結果であることを力説する。

第三章は，『隋書』に見られる漕国が，定説のザーブリスターンではなくて，ヒンドゥークシュ西足道において六世紀後半に急成長したカーピシーであることを証明し，第四章において，玄奘が滞在した迦畢試国大都城をベグラーム遺跡に同定する。カーピシーの歴史を考える上で最も重要なベグラーム最上層第三期は，R＝ギルシュマンによってその終末を四世紀末と定められ，これが定説化していたが，近年急速に発展したヒンドゥークシュ南北の考古学的調査による知見から，第三期の特徴である円圏印紋土器と建造物の円形稜堡は，南麓で五世紀以降に出現して，小型植物印絞と方形稜堡という異なった伝統をもつヒンドゥークシュ北麓に，六世紀後半から七世紀に波及する。この事実をヒンドゥークシュ西足道の開設と関連させ，ベグラーム第三期を六世紀後半から七世紀に定める。

第五章は，漢文資料によって七，八世紀のカーピシー史の枠組が示される。六世紀後半に成立した罽賓王朝は，七世紀前半にはベグラームを首都としてガンダーラまで十余国を版図とし，616年には隋への朝貢が始まり，唐朝にも継承された。658年には唐の支配下にはいった。しかし650年代以降アラブ＝イスラム勢力の侵寇をうけて，罽賓王朝は700年頃この地に興ったテュルク朝と交替する。中国史書の烏散特勤灑，ビールーニーのバルハテギン，『往五天竺国伝』の阿耶は，同一人物で，その初代の王である。九世紀になると，宰相カラルがヒンドゥー教を奉じて王権を簒奪し，ヒンドゥー＝シャー朝を開いたが，870年のイスラム化にさいして首都をインダス河西岸の現フンドに移した。

付論は，このエフタルとテュルクが，カーピシー＝ガンダーラに登場する以前から720年代までは，その根拠地をクンドゥズ河の中流と下流に，トハーリスターンを南北に二分するかたちで共存していたことを明らかにしたものである。

第六章では，六世紀後半から九世紀に及ぶカーブル河流域において，ヒンドゥークシュ西足道の開設にともなう貿易の活況と支配者の護持を受けて，仏教造寺活動が活発化する一方，ヒンドゥー教もかなり盛んで，両宗教が並存していたことを，大理石製ヒンドゥー神像の検討と行歴僧伝から示し，以上の考察から，従来は二世紀と五世紀中葉の間と考えられてきたバーミヤーンの大仏造営年代を，六世紀中葉以後に位置づけた。

論文審査の結果の要旨

ガンダーラとカーピシーの仏教寺院，塔，彫刻の研究，漢文資料による地名同定などにかんする個別的

な論著は決して少なくない。しかし中央アジアへの伝播のもととなった両地方の仏教の実態を把握するためには，ガンダーラとカーピシーを一つの地域と見ることが重要であることを強調する著者は，本論文において，13回に及ぶ自らの現地調査に基づく成果の寄与を含めて，近年急速に進展してきた考古学的知見を基礎に，現地資料でないことから従来顧みられることのなかった仏僧伝などの漢文資料を活用して，四世紀から九世紀にいたる歴史の解明を目ざす。本論文を『カーピシー＝ガンダーラ史研究』と題する所以であり，「インド史と中央アジア史のはざまにあって軽視されてきた」地域について，著者はかなり明確な歴史像をえがくことに成功した。

著者は，六世紀中葉をカーピシー＝ガンダーラにおける歴史の大きな転換期と認めて，前後の二期に分け，前期をガンダーラの時代，後期をカーピシーの時代とよぶ。これは交通路の移動に関連するもので，四世紀から六世紀前半にかけて法顕，宋雲などが利用した，ターシュクルガーンからインダス河沿いに下る，いわばカラコルム西脈道の時代から，ジナグプタ，ダルマグプタ，玄奘などが利用した，ターシュクルガーン，ワッハーン，雪山西足，カーピシーの，いわばヒンドゥークシュ西足道の時代への転換であったことを，仏僧伝等の詳細な分析から明示する。

交通路の移動による小地域の消長を明らかにして，従来カシュミールを指すものと決めて疑われることのなかった罽賓が，四，五世紀の訳経僧の伝記を収める『出三蔵記集』と『梁高僧伝』ではガンダーラであることを論証する。また，中央アジアの仏教を語るとき避けることのできないバーミヤーン大仏の造営年代についても，二世紀から五世紀中葉の間とする意見が根拠に乏しいことを指摘し，ヒンドゥークシュ西足道への移動と関連させて，新しく六世紀中葉以後という年代を提案する。

さらに定説の批判的検討は，エフタルによる破仏問題にも及ぶ。ガンダーラ仏教の終焉はエフタルの攻略によるもので，仏教彫刻も五世紀末に終るとみることが従来一般に行われてきた。出発点は，山田明爾の示唆によるが，エフタルのガンダーラ侵入以後も仏教がなお行われていたこと，むしろガンダーラ地方における仏教の衰退は，六世紀中葉にテュルクの攻撃で本拠を攻略されたエフタル勢力の分解と，それにともなうカラコルム西脈道の廃絶に起因するという著者の主張は，現地調査の豊富な経験を背景にもっている。

また，カーピシー＝ガンダーラおよびその南西のザーブリスターン，北のトハーリスターンから出土した大理石製ヒンドゥー神像の年代について，自らの発掘資料の検討を通じて，従来の九世紀説を否定し，型式学的研究によって，七，八世紀にあてた点も重要である。これはヒンドゥークシュ西足道が活発であったことの証拠であるとともに，『大唐西域記』等に見られるヒンドゥー教などの宗教と仏教とが共存していたこと，そして仏教が衰退過程にあったことを示しているからである。

以上のような新見解の提示を通じて，中国の仏僧伝等が，現地資料でなくても，その使い方が適切であれば，カーピシー＝ガンダーラの歴史資料としての価値をもつことを具体的に示したことも本論文の重要な成果の一つであろう。

ただ，本論文に瑕瑾がないわけではない。もともと資料の不十分な地域の研究であるから，推測による部分が存在することは止むをえないところであるが，薄弱な根拠で断定した箇所が一，二ある。また仏教の伝播にとって重要な要素となる仏陀像の成立の問題に触れなかった点も惜しまれるし，なお検討すべき

課題も残されている。しかし，これらの点は本論文の価値を損なうものではない。

議論の分れるいくつかの問題（例えばバーミヤーンの大仏造営年代など）について，説得力のある見解を示すことができたのは，著者自身で構想したカーピシー＝ガンダーラ史におけるそれぞれの問題の位置づけが適切であったからであり，さらに構想そのものの妥当性を証するものと高く評価される。

よって，本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。

昭和61年３月17日，調査委員３名が試験を行った結果，合格と認めた。